

九手連広報紙

はっけん

<平成15年度新役員の選出>

会長 ; 村本 宗和 氏 (熊本県)
副会長 ; 川添 啓一 氏 (鹿児島県)
南里 トミエ氏 (佐賀県)
事務局長 ; 前淵 洋一 氏 (熊本県)
事務局員 ; 田中 三佐代氏 (熊本県)
理事 ; 和田 修 氏 (福岡県)
谷脇 章子 氏 (長崎県)
中山 博貴 氏 (宮崎県)
南里 トミエ氏 (佐賀県)
森 保夫 氏 (熊本県)
川添 啓一 氏 (鹿児島県)
中元 教博 氏 (大分県)
監査 ; (福岡県)
(大分県)

| | | |
|------|----|-----------------------------|
| 役割分担 | 組織 | 和田 (福岡)、谷脇 (長崎) |
| | 研修 | 川添 (鹿児島)、南里 (佐賀) 中山 (宮崎) |
| | 広報 | 森 (熊本)、中元 (大分) |

<掲載内容>

1. 各県手連情報とサークル紹介
2. リーダ研修会の概要
一般研修 : 講演内容の要点のみ
リーダ研修 : 3団体代表者の挨拶
の要点のみ記載 .

<主な活動状況>

1. 平成15年度評議員総会(H15.6.28)

場所 ; 佐賀県武雄市民会館

報告事項

- ・平成14年度事業報告
- ・平成14年度決算報告および監査報告

審議事項

- ・平成15年度事業計画案および予算案
- ・平成15年度役員改選
- *原案通り可決された.

内容及び資料は出席評議員に確認ください.

2. 平成15年度リーダー研修会(H15.6.29)

場所 ; 佐賀県武雄市民会館

幹部研修

テーマ ; 九州の3団体の歴史を知り、明日を語る

- ・3団体代表者によるパネルディスカッション
- ・講師 松永 朗 氏 (九聴連理事長)
橋本 博行 氏 (九通研運営委員長)
村本 宗和 氏 (九手連会長)

一般研修

テーマ ; 魅力ある手話サークル

- ・講師 西川黎明氏 (佐賀短期大学名誉教授)

3. 第2回幹部会議(H15.6.28)

場所 ; 佐賀県武雄市民会館

テーマ ; 九手連展望 (試案)

4. 九手連理事会

- ・第1回理事会(H15.6.27-28)武雄市
- ・第2回理事会(H15.9.20-21)熊本市

<その他>

1. 九手連理事会の予定
 - ・第3回理事会(H15.11.29-30)熊本市
 - ・第4回理事会(H16.2.28-29)熊本市

九州手話サークル連絡協議会

〔事務局〕

〒866-0892 熊本県八代市古閑下町1717-43
前淵 洋一 (0965-35-2653)

発行月日 ; 平成15年11月7日

発行責任 ; 村本 宗和

広報担当 ; 中元 教博

<大分県>

大分県手話研修会

手話学習者およびろう者が一同に会し、研修を行うと共に相互の交流を深める。

サークル訪問交流会

県内の手話サークルを訪問し、各理事がサークルの実態を把握し今後の活動に活かす。

<サークル紹介>

サークル名(活動市町村)

手話サークルはぐるま(夜の部)
大分県大分市

創立年月

昭和46年10月17日

サークル会員

111名

専門部の活動状況

- ・事務部：例会日の運営補助等。
- ・学習部：手話技術、ろう教育学習等。
- ・企画部：交流やレクを重視した活動等。
- ・広報部：広報誌の定期的発行。

サークルの特徴

手話技術の学習はもちろん、ろうあ者を取り巻く社会について学習し数々の制約をなくす活動を行う。

PRしたい事

大分県で初めて設立された歴史あるサークルです。これからも諸先輩の名に恥じぬよう、活動して行きたいと思っています。

<宮崎県>

事業の多くが、県聴覚障害者協会ならびに手話通訳問題研究会等との共催です。単独事業としては

県サ連研修会

講演会、サークル運営などに関する意見交換、ろうあ者を講師とした入門レベルの手話教室など。

<サークル紹介>

サークル名(活動市町村)

都城手話サークル
宮崎県都城市

創立年月

昭和47年9月1日

サークル会員

52名

専門部の活動状況

- ・研修部：学習会の進め方を相談したり、学習会の資料作り等。
- ・レク部：市聴協と協力して様々な交流行事の企画、準備、運営等。

サークルの特徴

市聴協と共同で役員会やレクリエーションを開催するなど、常に二人三脚で活動しています。

PRしたい事

毎週火曜日夜7時半から、市民会館前の総合福祉センター3階にて例会を行っています。ぜひ一度お立ち寄りください。



<鹿児島県>

県聴覚障害者協会主催の大運動会

聴覚障害者協会主催であるが、県手連理事及び会員も協力・参加し、種目も企画・担当して、交流を図っている。ちなみに昨年の県手連の企画種目はパン食い競争(おんぶして)でした。

県手連主催の1日研修会/手話通訳勉強会

手話通訳の経験に関係なく、参加できるような内容で企画しています。形式は全国統一手話通訳試験にあわせ、学科・実技を中心に行なっています。聴覚障害者の方々の協力も毎回頂いている。

<サークル紹介>

サークル名(活動市町村)

鹿屋手話サークル「やまびこ」
鹿児島県鹿屋市

創立年月

昭和51年4月1日

サークル会員

38名

専門部の活動状況

- ・機関紙部：主に月1回の機関紙発行。
- ・学習部：主に例会での手話に関する勉強。
- ・企画部：サークル内での行事企画・計画・実施。

サークルの特徴

毎月第1週：学習部，第2週：企画部，第3週：機関紙部，第4週：三部会という様に工夫をして手話の勉強やレクを実施。

時には、手話に限らず専門の講師を招いてお話を聞くこともある。

PRしたい事

鹿児島県の大隅半島に一つだけの手話サークルです。会員は、鹿屋市在住の方だけでなく、大隅半島のあっちこっちにいます。そのせい？！かどうか・・・会員は個性豊かな人たちばかりです。



<佐賀県>

県手連手話研修会

経験の浅い会員対象の研修会
今年度の日程はまだ未定。

サークル名(活動市町村)

唐津手話の会
佐賀県唐津市

創立年月

昭和50年

サークル会員

49名

サークルの特徴

第一、三火曜日 レベル別手話学習
第二、交流会、第四ビデオ、講演会等
地域の行事にろう者とともに積極的に参加。

<長崎県>

手話スピーチコンテスト

サークル入会1年目の人たちに、ろう者と共に活動する場。県ろう協，全通研，県手連の3団体合同で企画。

11月に行われる「ろうあ文化フェスティバル」で発表する。

<サークル紹介>

サークル名(活動市町村)

時津手話サークル
長崎県西彼杵郡時津町

創立年月

昭和48年11月29日

サークル会員

40名

専門部の活動状況

- ・企画部：例会(学習・交流)の企画運営。
- ・広報部：広報紙作製。
- ・庶務部：広報紙等の発送，備品の管理。

サークルの特徴

みんな協力的で楽しい人ばかり！！

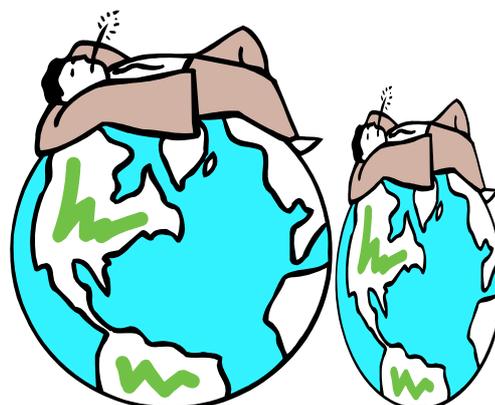
とても、にぎやかなサークルです。手話技術向上よりも“みんなで楽しく”をモットーに活動をしています。

地域のろう者がいつも遊びに来て下さる楽しいサークルです。

PRしたい事

今年，結成20周年を迎えます。

「20周年記念行事」と「緊急時，災害時のろう者への情報提供」について，学び具体的に活動を展開しております。



リーダー研修報告

<一般研修>

テーマ:「魅力ある手話サークル」

講師: 西川 黎明 氏(佐賀短期大学名誉教授)

私は、1928年(s3年)に生まれました。現在75歳になりますが、私の75年間と友人の75年間同じ時間が経過していますが、その歩んできた人生は個人個人異なります。

私の青春時代は戦時中でした、小学校のとき父を亡くしましたが、生活保護もありませんでした。母は3人の子供を抱え大変な思いをしました。石川啄木氏の「働けど働けど、我が暮らし楽にならず、ずっと手を見る」の詞を思い出します。

生涯の中で自分の意志とは別に、偶然によって自分の人生が変わることがあると思います。私は、高等2年生のときまで先生が進める師範学校予科に進むようにしていましたが、体育の時間、人文字を航空写真を撮影していたヨカレンに憧れ、入隊検査を受けましたが身長が3cm足らず入学できませんでした。しかし、空を飛ぶという夢・憧れを忘れられず兵族になったわけです。

戦争は、多くの尊い命を奪います。死を目的に同種の命を奪うのは人間だけです。「人を殺すな!」という教育より「人を殺せ!」という教育方法の方が成功しているのは何故でしょう。その小論文に接したときチャプリンの殺人狂時代を思い出した。

人生で人との出会いは偶然であり、その偶然は日常茶飯事である。仮に貴方が今、手話通訳をされていますが、何が貴方にきっかけを与えたのでしょうか。

私は少年自然の家(佐賀県山内町)で、佐賀のろう学校が毎年2泊3日で来ていました。当時、手話は許されていませんでした。私は当時、身体障害者を対象としたボランティアも承くしていました。ボランティアは「違和感」「同情心」、哀れみは、ボランティアではありません。

「平常心」で行うのがボランティアであると思います。

そのろう学校と他団体が青年の家で学習をしているとき、「夕べの集い・朝げの集い」を共同でしました。ろう児は読話術ができますが、発声は苦手なんです。

小学校5~6年生のろう児が団体紹介のとき、発声したのですが、それを他団体の生徒は「クスッ」と笑いました、そのろう児は緊張し萎縮し自身をなくしました。

その時ろう学校の先生が私に、この子は今失ったものを取り戻して山を下りることが出来るでしょうか。と言われました。

非常に私はショックでした。数日後、笑った生徒の学校は帰り、新しい学校が青年の家にきました。

今度は始めからろう学校の生徒さんが居るとの情報を提供していました。そして「夕べの集い」の時、ろう学校からあの笑われ自信を無くした生徒が「私たちの学校は…」と紹介を始めたのです。他の学校の生徒は、彼の発声に耳を傾け笑うような子供はいませんでした。すると、そのろう児は、緊張がほぐれたのが明るく堂々と紹介をしました。



6月29日、佐賀県武雄市で開催されましたリーダー研修会の概要を下記に報告します。詳細につきましては、九手連理事および研修会参加者にご確認ください。

一般研修は講演内容を、また幹部研修は3団体代表者の挨拶内容を掲載しております。

~~~~~

どうでしょうか、ボランティア活動は肌と肌の  
触れ合いだと思いませんか?



ボランティアは、肌で触れ合って得るものだと思います。空気は私たちにどのような存在ですか「空気と音」を結び付けて考えることができるでしょうか。音のない世界を生きたひとはどのように感じているのでしょうか。

方法論の問題としてコミュニケーションメディアが出てくるのだと思いますが、1対1(パーソナルコミュニケーション)といいます。コミュニケーションは何かを媒体として感情・意志・態度を相手と交換することです。

私の子供(次男)が、朝食後、薬を飲むため私に水をコップに汲んでくれる様に頼んだのですが、ただ「水!」だけを言ったのです。私はコップの水を彼の顔にかけたのです。言葉には主語と述語があってその「言葉」で自分の意志を伝えることが大切なのです。その事を彼は理解したのだと思いますが、今こ

とばの世界で仕事をしています。

私たちは、普段何気なしにことばを使っています。三重苦だったヘレンケラー女史は、7歳で物には名前がついていることを知った。そして、私は2度生まれたと言っています。1度目は母から生まれたとき2度目は言葉を知ったとき。そして、自分の悲劇を嘆くのではなく、残った私の素晴らしい能力「触れる」

を延ばして役立てたいと思ったそう。

乙武氏の「5体満足」の本の陰に、全ての障害者と同じ努力を期待する考えがあることを感じる。

障害者ひとりひとりにあった対応をすることが大切だと感じます。

## <幹部研修>

テーマ：「九州の3団体の歴史を知り、明日を語る」

講師：松永 朗 氏（九聴連理事長）

：橋本 弘行 氏（九通研運営委員長）

：村本 宗和 氏（九手連会長）

### （松永九聴連理事長）

おはようございます。九聴連理事長の松永です。皆様には、日頃から聴覚障害者のためにご活躍をいただき、ありがとうございます。

今年から、新しい福祉が始まるということです。手話通訳や手話ボランティアなども福祉情勢の変化に合わせて変わらなければなりません。私たち聴覚障害者としても、将来の10年を見据えて計画を作っていかなければならないと思います。手話サークルも全通研も同じ考えで10年計画をつくり、聞こえない人と一緒になってどう進めていくかを検討しています。

今日は、いいきっかけなので皆さんと一緒にこれからの方向を論議したいと思います。

さて、第1に考えたいことですが、聴覚障害者がいなくて手話もなかったとしたら手話サークルを作ることもないですね。手話があったから皆さんが活動するきっかけになったのではないのでしょうか？そういう基本を見ていきたいと思えます。

以前のことで、NHKの番組で夜12時から放送された「アマゾン」、見た人はいますか？アマゾンには、いくつかの集落がありずっと森の中で生活しています。集落ごとに言葉が異なります。たまたま、二人しかすんでいない集落があり、この集落のことをNHKが取り上げて取材した放送に引き付けられて見ていました。その二人は20年位前、子供のときに他の集落から移ってきました。イギリスの医者が調査に来たときに二人が発見されました。二人は耳も聞こえるし、喋ることも出来ますが、他の集落の人とは言葉が違うので交流は出来ません。ろうあ者にも同じことが言えます。

ろうあ者は手話で生きている社会があり、逆にそれを排除している社会に生きてきた歴史があります。一部では手話を取り入れてみようという地域もありましたが、深い理解はありませんでした。ろうあ者は引きこもってしまい、ろうあ者の世界を作ろうと考えました。



今は、聞こえる皆さんが手話を使っているのを見て、ろうあ者の皆さんは喜んでいますが、しかし、多分一線を画しているのではないのでしょうか？この気持ちは、NHKの放送のように「文化の違い」や考え方の違いがあることが原因だと思えます。そこをどう克服してろうあ者の社会参加を促していくかが将来への課題だと思えます。その役割を果たすのが手話サークルではないかと思っています。

私は永い間手話を指導してきました。ここにいらっしゃる村本さんも若い時に手話講習会にこられ、指導しました。その時はまだ手話に対する理解は浅かったですね。「聞こえないと困ることがたくさんあるから助けましょう」という態度が見えていました。今は、ろうあ者も車の運転は出来る、仕事でパソコンも使える、大学にも通える、会社勤めでそこそこの給料も貰っていい暮らしも一般的なみにできる状況にあります。

その中で、助けなければならないことがあるかどうかわからなくなっています。だから、手話だけを見るのではなくその裏に隠されているたくさん問題を見なければならぬと思います。私が言うまでもなく、皆さんはご存知だと思います。これらの問題を、これからの活動でどう克服していくのかを考えたいと思えます。

### ひとつの考え方を提起します。

障害者プランは「7年間戦略」として昨年で終了しました。また、「アジア太平洋の障害者10年」計画も終了しました。

しかし、その後の「新しい10年の計画」を作らなければなりません。

「新障害者プラン」を読んでみますと、そのほとんどが障害者全般のことは書いてありますが、聴覚障害者に対する対策の詳細は書かれていません。全日本ろうあ連盟に尋ねましたら「国へは要望している」といわれましたが、論議の中からは外されているようです。皆さんにもこのことを考えてほしいですね。「聴覚障害者は手話通訳が普及すればそれでよし」とする考え方があるのではないのでしょうか？手話通訳が普及しても、その裏にたくさんの不都合が残るということが理解されていないのでしょうか。そのいい例が「介護保険」です。そこには手話通訳の保障がありません。聴覚障害者の訴えだけでなく、皆さんや通研の方々など、聞こえる皆さんの声も必要です。内容を深く理解してサークル活動に活かすことが課題だと思えます。

二つ目に、手話はいろいろな面で伸びてきています。しかし、残念なことに手話の技術取得だけに集中しすぎていると思えます。サークルや全通研の活動の中でエキスパートを育てていかなければならないと思えます。

三つ目には、社会福祉を作ることについて見直していきたいと思っています。

法律や制度も必要ですが、最終的には福祉の現場で一人一人が大切にされる「気持ち」が大切だと思います。いい人がたくさんいれば、幸せも深まっていきます。悪い人が増えれば逆に幸せは狭まります。前述のように、専門的に正しく説明できる人を育てていかなければならないと思えます。

これからの、「新障害者プラン」にあわせてサークルがどう対応すべきか、人材育成とあわせてみなさんと研究を深めていきたいと思えます。よろしく願います。



## (橋本九通研運営委員長)

全通研九州ブロックで運営委員長をやっています橋本です。全通研本部の財政部長、それから昨年設立された全国手話研修センターの評議員をしています。

今日は、全通研の歴史をお話したいと思います。全通研は昭和49年に出来ました。全通研の出発点は、昭和43年に開かれた全国手話通訳者会議です。この通訳者会議を呼びかけた顔ぶれは、伊東雋祐氏(現全通研運営委員長で、当時は京都のろう学校の若手=バリバリの先生でした)と、福島薫氏(故人で大阪のろう学校の先生)、貞弘邦彦氏(故人で当時は厚生省の障害福祉の専門官)、名古屋の丹治田鶴子氏という女性。こういう人たちが呼びかけ人になって、全国で活動していた手話通訳者が「いつまでも点の活動をしていても聴覚障害者の福祉は発展しない」ということで、全国に呼びかけていきました。各県のろう協などに呼びかけ、把握できたのは100人足らずで、その中で集まったのが71人でした。

これが全通研のスタートになっています。昭和45年に手話奉仕員養成事業が始まりました。全日本ろうあ連盟はこのずっと以前から「勉強する場が必要」と主張していましたが、厚生省に手話奉仕員養成事業を決断させたのが、この全国手話通訳者会議の開催でした。

出発点になったのは昭和43年の全国手話通訳者会議でしたが、この後に会議を重ねて昭和49年に創立総会が開かれました。このときに集まったのは287人でした。71人を出発した手話通訳者会議が、全通研創立時では287人が集まる会議になっていたということです。この中に、九州の代表が一人いました。最近の人は「知らない」といわれませんが、大分の長谷川先生です。

全通研創立に関わった九州唯一の人で、大分の土屋先生(全日本ろうあ連盟)と二人三脚で頑張られた人です。

九訳連の設立にも関わり会長を永く歴任された人で、この長谷川先生が九州代表の全通研運営委員として頑張ってきた。1985年(昭和60年)に私と交代するまで全通研運営委員を続けられ、最後は副運営委員長として頑張っていたいただきました。

全国手話通訳者会議の流れの中で、最初に模索したのは「全国の手話サークルの組織を作ろう」ということでした。幻の「全サ連」みたいなものでしょうか？

この当時、全国に手話サークルは100くらいしかありませんでした。有名なサークルは京都の「みみずく」とか東京の「かえでの会」、神戸・大阪とありましたが、九州ではまだありませんでした。これらのサークルに呼びかけて全国組織を作ったらどうかと模索していききましたが実現しませんでした。

その後、昭和45年に手話講習会が始まり46年の調査では全国でサークル数が300を超えました。その後毎年のように増えていき、全国都道府県で毎年50以上のサークルが誕生しました。このため、サークルの実情把握が難しくなっていました。

また、サークルでは毎年のように過半数の会員が入れ替わるという実情もあり、消えていくサークルも多かったようです。また、サークルは手話の学習をするという目的を持って集まってくるから、全国的視野で運動しようというようなことにはなりません。

結局サークルの全国組織は難しいということから、他に全国組織は何ができるかと考え、サークルで頑張っている個人を対象として全国組織を作ったらどうかということで全通研が誕生しました。



サークルは手話を勉強するという人が会員です。全通研の活動の大きな柱に「研究活動」というものがあります。運動もやりますが、大切なものは研究活動です。研究は専門化が必要です。手話はわからなくても聞こえない人のことを研究する人は必要です。大学の先生や他の専門家の人たちを組織に取り込んで自分たちの力を高めていかなければなりません。このような目的で全通研が立ち上がりました。

S49年に全通研が創立されて、支部第1号は山口でした。九州のトップは福岡で、S53年7月に福岡支部ができました。なぜ九州で福岡がトップかという、翌年の1979年に全国手話通訳問題研究会を福岡で開くという理由からでした。

次に支部ができたのが大分です。S55年でした。翌年、宮崎支部が出来ます。大分支部ができた理由は全日本ろうあ連盟長土屋先生のお膝元に「連盟長のお膝元に全通研の支部がないのはだめだ」ということで支部を作り、宮崎は安藤さんのお膝元でした。だから、なかなか活動ができませんでした。

その後、しばらく経過して長崎支部ができ、熊本支部ができてこれを契機に九州ブロックが誕生し、今日の活動がスタートしました。その後、鹿児島、沖縄にもできて、最後は佐賀でした。佐賀の場合は全国でも最後の47番目の支部でした。実は奈良県支部誕生と同じ日なんですが、午前と午後の違いで佐賀県支部が最後となりました。

最後に、全通研がこれから目指すものをお話したいと思います。基本的理念は運動と研究です。ろうあ協会も含めて「運動」という視点が弱くなっています。手話サークルにおいても同じで、運動の視点で話をする機会がなくなってきています。

ですから、全通研まで運動の視点が弱くなると、日本の社会に対し聴覚障害者問題を運動として広げていくと同時に政策を提言していくことができなくなります。

もうひとつは研究です。大学の先生にも手話について研究する人はいますが、少し道が違っているのではないかと思います。私たちは全通研として、今まで培ってきたものを基本にした研究を追及しなければなりません。

この「運動と研究」を二つの柱として進んでいきます。

もう一点、大切なことですが、「世界通訳者会議」という名称で会議が開催されていますが、「世界通訳者協会」というものを設立しようという動きがあります。日本はアジアの中で、聴覚障害者問題に対する運動や研究が最も進んでいる国です。

全日ろう連はずで「世界ろうあ者会議」の中で大きな役割を果たすようになっていっていますので、今度は聞こえる立場でアジアの代表としてそのような運動を担っていかなければならないと思っています。

## (村本九手連会長)

村本でございます。

九州の中で手話サークルが誕生したきっかけは、昭和45年に厚生省が行いました手話講習会で、終了後に各地でサークルが誕生しました。昭和47年に九州手話通訳者連絡会議が設けられ、49年には正式に「九訳連」=九州手話通訳者連絡会で発足しました。

当時、手話サークルの目的が明確ではありませんでした。手話講習会の講師はろうあ協会が担当していて、松永さんとも「テキストをどうするか」と相談して「みみづく」や広島「もみじ」の講習会テキストを取り寄せ、熊本にあうようにアレンジして作った記憶があります。

熊本は、昭和43年に手話講習会が始まりました。翌年の44年に熊本で全国身障者スポーツ大会が開催されるため、手話通訳者養成ということで熊本県が実施しました。これに顔を出し、私は昭和42年に熊本県ボランティア団体連絡協議会を立ち上げていました。当時のボランティアは「してあげる」というようなものでした。

そのときに手話講習会が開かれ、会長から「講習会は県の主催だろうが、多分講習会が終わったらそのまま終わるかもしれない。だからそこに参加して終了後に組織化し、それをV協に組織しなさい。」と指示を受けました。



その頃は松永さんは講師ではなく後ろの席に座り、私が隣りでした。お互いにいつもそこにいることを気にかけていたと思います。私が話しかけると松永さんは手話で返してきました。「しまった、話が通じない」と思いましたが、手話もわからず身振り手振りで会話しました。松永さんは声もあって自分の身振り手振りを理解してくれることに「味方だ、お付き合い相手だ」と直感しました。

「来年からは、ろうあ協会の自主事業で継続してはどうか?」とお願いしました。結果、ろうあ協会に了承していただき、翌年(44年)も講習会が開催され、全国身障者スポーツ大会で頑張った人たちを中心にして、サークル結成を目指しました。

当時、ろう学校の教育現場では、教育手段として手話を使うことに周囲からかなり抵抗が強く、学外において手話を広めるためにサークルを活用しました。私は手話を勉強するため松永さんに「金魚の糞」のようについて回りました。そのお陰で、県内各地の「日曜教室」や講習会に行くことができました。

県内を回る中で、ろうあ者の考え方が地域によって異なり、また年齢や障害発生時期によって全く違うことを体得しました。だから一つの問題が発生したとき、一つの手段では解決できないし、かなり広範囲な手段で解決しなければならないと今でも考えています。

昭和46年に九聴連大会が開かれ、その中で「手話に関する分科会」が設けられましたので、私たちがもかかわりを持っていきました。九訳連を昭和49年に設立し、昭和56年にやっと九訳連独自の研修会を開催することができました。

昭和61年全通研九州ブロックが設立されたことを機会に、九州レベルの研修会を三団体主催事業として位置づけ、内容も各団体の特色を生かした研修会として進め、現在に至っています。また、平成3年には「九手連の15年の歩み」という記念誌を発刊しました。

来年は九手連設立30周年を迎えますので、これまでの歴史をまとめた記念誌を発行するため、執行部で編集委員会立ち上げについて、昨日の評議委員会の中で新年度事業計画として提案し承認されました。

このような流れの中で私たちがやってきたことについて考えてみますと、サークルの性格とその難しさ、定着性の悪さ、せっかく育てたリーダー的な人もやがて辞めていってしまうことの繰り返しというような問題があります。

このような色々な悩みを、この九手連の中で討議していくことが必要だと思いますが、実際は論議にいたっていないという九手連の弱さに対して、皆さんに申し訳なく思っています。ただ、これから皆さん方に考えていただきたいのは、九手連という組織でひとつの事柄を成し遂げていくためには、本当の意味で県を代表した人たちによってきちんと運営されていくような理事会であり、そして、社会の中で必要とされ期待されるサークル・県手連・九手連にならなければなりません。

私たちがこれから進むべき方向について、実質的討議ができるような集団にしていかなければなりませんし、お互いに腹を割って話し合えるような場にしていかなければなりません。

これは九手連のみならず県サ連・サークルでも同様だと思います。九手連の組織を確たるものとするためには、各サークルが磐石の態勢をとっていきようなものでないと、県サ連・九手連も弱くなってきます。

私たちの願いとして、まず九聴連及びろうあ協会に対し、全日本ろうあ連盟で出されています「基本方針」「手話サークルに対する指針」を基盤として「あるべきサークルの姿」について各サークルに指導し、周知徹底させていただきたいと思えます。

私たち自身が「方針」や「指針」を勉強しなければなりません。やはりろうあ協会が中心となって共通理解を得ていかなければならないと思えます。

今後とも、議論と交流を大切にしながら確固たる信頼関係のもと活動を展開していきますのでご協力の程、宜しくお願いします。



(これは、評議員総会の写真です) End 8